さざなみ国語教室
第445号　2019年4月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

「言葉を育て、心を育てる国語教室づくりを」

三上　昌男

平成最後の三月に、三十八年間の教員生活を終えました。たくさんの子どもと出会い、先輩や同僚に支えられ、多くのことを学びながら歩んできました。

さざなみ国語教室での学びも、自分の教育観や授業づくりの視点、実践の工夫につながっていると言えます。さざなみ国語教室の研究会の中で、「国語教室づくり」という言葉がよく使われてきました。国語科の授業だけでなく、学級経営とも異なる。言葉と心を大事にした温かい雰囲気の中で、確かで、豊かな言葉の学習が展開されるのが「国語教室」だと考えています。

＊言葉を育てることは、心を育てること、人を育てることである。
＊正直に話すと損をしたり、言い間違うと笑われたりする雰囲気の中では、言葉は育たない。
＊荒っぽい言葉で押さえつけていては、子どもは心を開かない。
＊丁寧な言葉はよそよそしい感じがすると、砕けた言葉で話してばかりいると、子どもは正しい言葉遣いを学ぶ機会を失う。
＊授業中、乱れた言葉が行き交う教室には、互いを尊重し合う話し合いは成立しない。

そのような思いでこれまで教師を続けてきました。言葉を育て、心を育てるためには、学校（教室）における言語環境の整備が大切であると考え、折に触れ話をしてきました。言語環境の整備に関する具体的な実践では、次のような取組があります。

◇あいさつ・返事の指導
◇望ましい言葉遣いの指導（「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」の学習等）
◇話す・聞くことのルール作り（話し方・聞き方名人、話し合いの手引き等）
◇今月・今週の詩（季節にあった詩・俳句等を掲示し、音読・暗唱する）
◇書くことで考え、伝え合う（ノート作り・日記・手紙）
◇辞書の活用（語彙を拡げ、言葉に関する知識を深める）
◇朝の会や帰りの会でのスピーチ活動・トーク活動
◇図書室の活用と読書の習慣化に向けた取組（図書室での授業・図書紹介の場作り・読み聞かせやブックトーク・朝読書や親子読書・読書記録等）

学校全体で、子どもや保護者・地域の方と一緒に言語環境を整え、言葉を学び、人と豊かにつながる国語教室づくりの実践を推進していきたいものです。

（さざなみ国語教室同人）

さざなみ

▼『深い学びを育てる教室のルール&学校のしつけ』（吉永幸司著。安田小学校編・小学館）でお世話になった新田哲之先生の通信を拝見した。４月２３日の記事に１年生の姿を紹介されていた▼「初めのうちはぎこちなかった朝のあいさつですが、数日もたてば、もう立派なあいさつができています。背筋を伸ばし、おはようございますと声にして、それから、おじぎをしてくれます」▼普通に読めば、入学して二週間目の子ども姿です。しかし、目を凝らし注意をして読むと次のような姿が見えてきます。「背筋を伸ばし」からは、校長先生に出会って立ち止まっている姿。次に「おはようございますと声にして」からは、口のなかでもぐもぐ言っているのでなく、先生の指導を受け教室で覚えたばかりのはきはきとした声。そして「それから、おれいをします」の「それから」です。普通に、「おはようございます」ということではありません。あらたまった場で気持ちを落ち着かせ、丁寧に相手に伝える「それから」です▼この文章の背景には、１年生の先生がしっかりと教室で指導されていることが印象的でした。二週間もたつと、挨拶ができない、忘れることを普通になる頃、「それから」心を込めて挨拶をする落ち着いた学校の雰囲気が伝わってきました。（吉永幸司）

師弟問答から自問自答へ

谷口　映介

新学習指導要領での「主体的、対話的で深い学び」を成立させる上で、大切にしたいことに次の３つのサイクルが挙げられる。少し長くなるが引用したい。

【みつける】
子どもが興味・関心のもてるものを見付ける。見付けたものを理解するためにもがき、そのもがく過程で、考えや解釈をつくり出して、他の子どもや先生とそれらを共有する。

【わかる】
考え学ぶことの満足感、達成感を味わうことで、さらにもっと知ろうとする好奇心や知的欲求をもつ。そのことについての自分の考えや解釈をさらに推し進め、それを友達や先生と共有して、知的な有能感・効力感を増す。

【ひろがる／ふかまる】
自分の考えや解釈をもとにして新しい知識をつくり出し、それを友達や先生とと共有する。そのテーマをさらに深く掘り下げたり、気付いていなかったり曖昧にしていた面までも理解しようとする。

【わかる】段階では、「質問する」「関連付ける」「推測する」「イメージを描く」「大切なところを見極める」「解釈する」「修正しながら意味をとらえる」という七つの方法も紹介されている。(同書p.15)注目したいのは、「質問する」という大切さである。これは、【みつける】段階でも大きく作用する。今までは、教師と児童（生徒）の関係は、所謂「師弟問答」ではなかったか。つまり、教師が問い、子どもが答えるという関係性である。問う－問われる関係性が終始続くのは本当に主体的な学びに繋がるのであろうか。

古くは、青木幹勇氏（1965）が『問題をもちながら読む』（明治図書出版）の中で「教師の専有であった発問権を子どもたちに分譲」することを提案している。無論、教師の発問を否定するものではない。子どもが発問者となるとき、子どもの範例として教師の発問は一層重要になるという意味でも述べられている。強調されているのは、子どもの素朴な疑問や意欲・関心を取り上げることの重要性である。これは、今でも、いや今だからこそ重要な示唆を与えている。師弟問答から、自問自答する子ども達を育てていきたい。解決する道筋・計画・方法を自ら考え、自分に身に付いた力を自覚できる力が「アクティブ・ラーニング」に直結するのである。

（滋賀大学教育学部附属小学校）

問い方を考える

勝矢　真一郎

本年度は、久々の２年生を担任することになった。２年生で印象的な教材と言えば、「スーホの白い馬」である。今回はスーホの白い馬を例に挙げながら、問い方について考えたい。

教科書教材「スーホの白い馬」について、２つの発問がある。

Ａ「スーホはどんな生活をしていますか？」

Ｂ「スーホは何時間働いているだろうか？」

スーホの生活環境や人物像を読み取らせたい場合、どちらの問い方が有効であるだろうか。「音・色・数・距離などゆれの無いもので問うこと、具体的に問うことで、子どもの思考を活性化させられるということ」を知り、以前２年生をもったとき、Ｂの発問を用いた。この発問をしたあと、子どもたちが、何度も何度も教科書を読み直し「ああでもない、こうでもない」と議論していたことが今でも記憶に残っている。子どもたちは「スーホは何時間働いているか」への答えを出すために、叙述をもとに物語の世界に入り込んでいた。「羊ってどうやって動かすの」「朝は何時に起きないとだめなのかな」「そもそも電気ってあるのかな」「電気がないと、ご飯をつくるのに時間かかるね」「自分たちと変わらない少年がこんなにたくさん仕事をしているの！？」「図書室に行ってモンゴルについて調べてみたい」など、様々な疑問や発見や驚きが生まれ、スーホに感情移入する子や、人物像を自分なりに捉え始めている子の姿が見られた。大切なことは「何時間働いているのか答えを出すこと」ではなく、「そのために、本文を何度も読み、考え、想像すること」にある。冒頭のＡのような問い方をしても、子どもたちは教科書を読み、答えてくれるであろうが、想像力を豊かにはたらかせることはできるだろうか。ごんぎつねにおいても、「ごんの気持ちを考えよう」より、場合によっては「ごんと兵十の距離は何メートルか」という具体的な問い方の方が有効な場合もある。このように、問い方をＢのように変えてみることで子どもたちの思考は活性化し、より深くお話の世界に浸り、想像しながら読み取っていくことだろう。「どのように問うか」ということは、「想像すること」を指導事項に掲げる読みの学習では非常に大切である。また、このような問いは、単元の流れの中、一授業の流れの中で、子どもたちの思考過程に沿い、ねらいをもってなされることで効果を高めるものであり、単発的・刹那的に行われるべきではない。そのため、指導者自身の深い教材理解、子どもたちの学びを見取る児童理解、単元の目的に向かってその問いがどのような役割をもつのかという単元理解などが求められてくるだろう。今年度も子どもたちに問うてみたい。「スーホは何時間はたらいているだろうか？」と。

（甲賀市立伴谷東小学校）

一年生のこくご

弓削　裕之

「算数で九九の勉強をしました」「体育で跳び箱ができるようになりました」国語では何を学んだと思っているのだろう。子どもたちが「国語の授業で〇〇を学んだ」と意識できることが次年度の学びにつながると考え、一年生最後の国語の時間に振り返りの時間を設けた。題名は「一年生のこくご」、めあては「こくごのじゅぎょうをふりかえって、かんそうをかく」とした。条件として、習い事や家庭学習ではなく、学校の国語の授業で学習したことについて触れるよう示した。すると、すぐに教科書を開いたり、「漢字も国語ですよね」などの質問をしたりする姿が見られた。

・わたしは、こくごのじゅぎょうで、とてもべんきょうをし、とても字がきれいになりました。わたしは一年かんこくごのじゅぎょうでたくさん学びました。わたしは、こくごのじゅぎょうのとき、かんそうをいっぱいかいて、とてもかんそうがかけるようになりました。

・じどう車くらべでじどう車のこともわかったし、「ひょう」もおぼえました。くちばしで「といかけ」ということばをおぼえました。どうぶつの赤ちゃんであたらしいひょうのかきかたもおぼえました。

・わたしがカタカナをならったとき「ン」と「ソ」がなかなか見わけられない文字でした。でも、ゆげ先生におしえてもらったら、こんなに上手になりました。じどう車くらべのときわたしはクレーンの「つくり」や「しごと」を見つけて、とてもたのしかったです。一ばんたのしかったのは、「つくり」がいっぱい見つかったからです。いまでも、おうちのじゅうちょうにいっぱいかいて、とてもたのしくて、まい日、学校からかえってすぐにかいています。こくごのじゅぎょうはとてもたのしかったです。二年生になってもこくごのじゅぎょうをたのしくやっていきます。

・くじらぐものじゅぎょうが一ばん大すきです。こくごのきょうかしょのまえのえが、くじらぐもだったのでさいしょはびっくりしました。わたしは、たいいくはにが手だけど、くじらぐもがたいいくのじかんに出てきてくれたらうれしいです。

・いつもノートをかくときになんのノートをかくのかどきどきしました。一年かんのノートはたのしかったです。らい年もたのしいノートだったらいいです。らい年もたのしみです。

子どもたちの中では、「国語の勉強＝書く勉強」というイメージがあるようだった。それだけがんばって鉛筆を持った一年だったのだろう。また、時間をかけて教材研究をした単元ほど子どもたちは達成感を感じており、子どもたちの記憶に残る学習のキーワードは、やはり「たのしい」だった。子どもたちは、来年も「楽しくてためになる」国語ができることを期待している。

（京都女子大附属小学校）

初任者研修　指導教員として

飯沼　俊雄

今年度も初任者研修指導教員として、初任教員に実践的指導力と使命感を養うとともに幅広い知見を得させるよう、指導と助言に当たっている。１年を左右する学級集団の土台をつくる大切な時期である４月に伝えていることは多くあるが、特に次の二つは一年間を通して、大切にしている。

Ⅰ．学級集団の状態は変化すること

Ⅱ．子ども個々の実態と学級集団の状態に合わせて、教員の指導行動をアレンジすること

現在、学級集団づくりの目的は拡大している。不登校やいじめ問題を発生させない学級集団づくり・学級崩壊を防ぐ学級集団づくりに、高い資質・能力を育成する学びを支える学級集団づくりも加わった。より緻密で計画的な学級集団づくりが求められている。河村（2012）は、学級集団の状態の変化を、「学級集団の発達過程」と呼び、次の五段階で捉えている。第一段階：混沌・緊張期、第二段階：小集団成立期、第三段階：中集団成立期、第四段階：全体集団成立期、第五段階：自治的集団成立期。

混沌・緊張期のこの４月、子ども同士の交流も少なく、学級のルールも定着せず、学級のまとまりのない段階において、本校の初任者も学級開きで、子どもの願いを取り入れた理想の学級の状態を共有する時間を大切に、理想の学級を達成するための学級目標を決め、子どもたちと合意を図った。そして、学級目標を達成するために子どもたちとともにみんなで守る約束を一つひとつ決め、その約束の意味や価値を子どもに丁寧に説明をしている。さらに、約束を一方的に押し付けるのではなく、子どもたちの意見も聞きながら、合意形成する時間を大切にしている。前担任からの引き継ぎの情報だけでなく、日々の子どもの観察から、指導内容の優先順位を決めているようである。２週間も経たないうちに、学級の子どもの状態に変化が見られるのがわかる。

この１年、指導内容を一方的に押し付けるのではなく、初任者教員に寄り添いながら、互いに学び高め合いたい。

【参考文献】河村茂雄　（2012）学級集団づくりのゼロ段階　図書文化

（湖南市立三雲東小学校）

「まんが日本昔話」の秘密

好光　幹雄

昔、「まんが日本昔話」というアニメがありました。子どもから老人まで大人気になり、その後も何度も何度も再放送されました。

さて、このアニメがヒットした理由が何なのか私はずっと考えていました。暇人ですかね？

ほのぼのするお話、愉快なお話、怖いお話、不思議なお話、どれも素敵なお話ばかりでした。

しかし、それはベースにあっても、それがヒットの原因ではないと思っていました。それでは、アニメのコンテでしょうか？しかし、民話風の穏やかなコンテでもなさそうです。なぜなら、毎回、お話毎に、絵を描いている人は違い、タッチも違ったからです。

そして、長年、教師になって三十年近く経って、やっとわかったのです。それは、脚本と声優のプロとしての技にあるのだと。

さて、その脚本と声優のプロの技とは何でしょうか？　次の二つの表現に何を感じますか？どんな違いがありますか？

Ａ「今日は晴れです。」
Ｂ「今日も晴れです。」

わずか１字の「は」と「も」の違いで受ける印象が違います。

Ａ「今日は晴れです。」
これは事実を述べています。いえ、事実しか述べていません。ちょうど、実験や観測をする科学者的な表現なんです。

しかし、
Ｂ「今日も晴れです。」
これは、晴れだと言う事実に加えて、今日もまた晴れが続いた、という事実にプラスαが付け加わります。それは、時として、表現する人の思いや感情を示します。

今日も晴れて嬉しい。今日も晴れてまた畑仕事ができる。
「も」という１字の中に、人の思いや感情などが凝縮して表現されているのです。

このような表現を「モダリティ」と言います。

「かさこじぞう」のお話の中で、爺様が雪に埋もれたお地蔵様にかさをかぶせる場面があります。

爺様は、「おうおう、つめたかろうのう」と言います。
「つめたかろう」だけでもいいのですが、「おうおう」や「のう」が付け加わることによって、爺様の地蔵様に対する気持ちが一段とよく分かります。

そして、お話の中のこのような会話文を丁寧に心を込めて読むことで、登場人物の気持ちや思いが肌から伝わるように聞いている人にも伝わります。

幼稚園でも小学校でも、読み聞かせが大切なのはそこなのです。モダリティを意識してお母さんが笑いながら、また涙をこらえながら読むこと、つまり、お母さんが感動した言葉をお母さんが感動したように読み聞かせることで、子どもは悲しいことを悲しいと感じるようになり、愉快なことを愉快だと感じるようになります。これが幼児教育の原点です。情操教育の原点です。お母さんに沢山読み聞かせをしてもらっている子どもの情緒が安定しているのはそのためなのです。

日本昔話の中には、このモダリティの表現が優れた表現で適切に出てきます。そして、それらのモダリティを実に上手く表現しているのがプロの声優たちなのです。本当に上手ですね。大人まで童心に返って引き込まれるのは、それなりの理由があったのです。

と言うことで、日本昔話のヒットの理由は、お話でも、絵だけでもありません。モダリティを適切に利用した脚本とそれを見事に演じた声優のなせるプロの技だったのです！と、私は思っています。

（さざなみ国語教室同人）

編集後記

▼三月例会（四四四回）提案は杉澤さん（八日市西小）三月に定年をむかえるにあたり授業・学校経営・国語についての長年の教育実践から考えてこられたこともとにした講話。要旨は次の通り▼先ず学校と教師については、学校は、ひとり立ちできるこどもを育てている。自立に向けた指導・評価・支援をしている。だから、教師はひとり立ちを支え、やがて離すことを念頭に仕事をしたい。教室は、複数の子ども同士が同じ、似た、違った思い・考えがあり、気づき考え、深め合い学び合うところと位置づけ、個にはじまり集団で学び合い、終末の学びの変容の自覚を個々のノートと黒板の右から左へ書かれた文字で自覚させること。学びの自覚を大切にすることは、考えさせることと書くことが欠かせないものになるという講話であった。具体的には、成果をあげた「話す聞く」具体的な実践例を示され学ぶことが多かった。▼月例会では、共同研究「子ども書く力の向上、並びに、書くことの指導法の開発と向上」の研究成果や今後の課題についての報告。NPO法人現代の教育問題研究所主催の「琵琶湖さざなみ俳句大会」（会場藤居本家）について。蜂屋さんからは学習指導要領について。北島さんから作文の実践、好光さんから個人研究「花明かり」の紹介があった。▼巻頭には、三上昌男先生から玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）